

## 年金昔話

製作：民主党

原作：新月島経済レポート

脚本：新月島経済レポート

声の配役：

定吉 熊倉一雄と同等の声優

お里 市原悦子

小役人 市原悦子

物売り 市原悦子

民主党 鳩山由紀夫

音楽：千住明

### *日本昔話テーマソング*

坊や一よい子だねんねしなー…

### *定吉の語り*

雪が降っておった。オラの村にも嫁っこが来るといのでの。隣の源爺さんが祝い酒をたらふく飲んで、肥壺に落ちて、それはえらい騒ぎじゃった。

### *情景 1*

雪国の嫁入り風景。お里が金襴緞子の花嫁衣裳を着て、馬に乗せられて村までやってくる。定吉は、庄屋の門口で村人達と共に袴姿でかしこまっている。

### *情景 2*

田舎の結婚式。定吉とお里が上座に座り、村人達が酒をついで回る、源爺は一升瓶を片手に泥鰯すくいを踊っている。

### *情景 3*

結婚式がお開きとなり、源爺が真っ暗な田舎道をフラフラと帰りぎわ、肥壺に落ちる。遠くの山でからすが「アホー」と一鳴き。

### *情景 4*

春。田植え。定吉が田に稲を植えている。傍らの畦道でお里がかいがいしく握り飯の支度。

### *情景 5*

夏。田の草取り。入道雲がムクムクと天を突く暑さの中、定吉とお里が田の草をとる。蛙がいる。蟬の音がうるさく響き、子供達がトンボとりに走り回る。お里は身ごもっており、腹が大きい。

### *情景 6*

秋。見事に稲が実り大豊作に村中が沸き立っている。あぜ道に赤子が藁籠に包まったまま、機嫌よく一人遊びをしている。そこに小役人が庄屋以下をぞろぞろと引き連れてやってくる

る。

小役人

「あー、これこれ、定吉であるな。見事な豊作ではないか。ところで今日は稲が実ったと  
のことであるので、ネンキンを取りに来た。庄屋から話は聞いておろう。」

定吉

「は一、なんか子難い話で、オラにはよくわからなかんたども…。」

お里が赤ん坊をあやししながら、心配そうに聞いている。

小役人

「お前たち下々のものは米が実ったと言っては、その米を炊いて食べてしまうだけで、先々  
のことを考えない。恐れ多くもこのたびお上におかれては、お前たちの老後のためにその  
米の一部をネンキンというものにしてくださるのである。お前たちはこれで年を取って田  
仕事が出来なくなっても、お上がネンキンからお前たちの食い扶持を出してくださるのだ。  
ありがたく米の一部を出せ。」

役人達が定吉の米を俵に詰めて持ち運ぶ。不安げに見つめる定吉夫婦。赤ん坊が何事かを感じ、急に泣き出す。小役人が手に持った帳面の定吉と書かれた文字の前に毛筆で○をつける。

情景 7

翌年の年金米の供出。同じ小役人と庄屋。赤ん坊は1歳となりハイハイをしている。

情景 8

10年後の夏。赤ん坊は太郎と名づけられ、その子供が10歳。定吉夫婦は30歳代前半。  
梅雨に雨が降らず、田にヒビが入っている。定吉とお里は遠くの川から水を汲んできて、  
田に入れるがとても間に合わず途方にくれる。太郎も懸命に手伝うが田はビクともしない。

情景 9

その年の秋口。台風が来て僅かに実った稲を根こそぎ吹き飛ばす。定吉とお里が何とか稲  
を守ろうと、稲に覆いをかけようとするが覆いは風で吹き飛ばされる。太郎ははしかにか  
かり顔に湿疹を出して寝込んでいる。

情景 10

定吉一家の家。太郎が寝ている枕元で定吉とお里の会話。

お里

「あんた、今年のネンキン米はのぼしてもろうたらどうじゃ。このままではろくすっぽ米  
もできんじゃろし、…。」

定吉

「馬鹿こくでねー。お前、なんたら罰当たりなことを言うだ。明日にはお役人様がネンキ  
ン米をおとりにいらっしゃるで。」

お里

「そいでも、あんた、このまま米を出したら、太郎に食わせる米もなくなるが…。お上が

太郎の米を下さるわけでもなかろうに…。」

定吉

「いんや、ネンキン米は出さねばならんのじゃ。お上のなさる事に間違いはなかろうが。」

情景 1 1

この年のネンキン米の供出。何とか米粒をかき集めて定吉がネンキン米を俵に詰める。小役人は懐から帳面を出して記帳しようとするが、庄屋が酒を振舞おうするのに相好を崩し、帳面を懐にしまいこんで酒を飲みだす。定吉のネンキン米の供出は記録されない。

情景 1 2

その年の冬。米がなくヒエを炊いて飢えをしのぐ定吉一家。太郎ははしかをこじらせて死んでしまう。お里が泣きながら太郎の位牌を抱きしめる。

情景 1 3

30年後のネンキン米の供出。定吉夫婦、50代。小役人も50代となり、無表情に年金米を受け取り、帳面の定吉の所に○をする。庄屋はもういない。

情景 1 4

50年後、定吉70歳。腰が曲がり剥げ頭に白髪がやっちょんまげになっている。社会保険庁と黒々と墨で書かれた役場の中で、定吉がネンキンの申請をする。何人かの役人がひまそうに鼻毛を抜きながら帳面仕事をしているが、誰も定吉に声をかけようもしない。定吉はキョロキョロとしながらも、やっとの事でネンキン米を取りに来ていた小役人を見つけて、話し出す。

定吉

「お役人様、オラもこの通りの年をとり、もう田仕事はできね。今日はお約束のネンキンを頂にきただ。」

小役人

「何を寝ぼけたことを言うのか！お上のネンキンは毎年秋に米を出したものだけがもらえるのであるぞ。お前は不作の時には米を出さなかったではないか！」

定吉

「何を仰います、お役人様。オラは不作のときにも、ヒエを食って米をネンキンにお出ししております。」

小役人

「証拠があるか。」

定吉

「オラたちのようなものに証拠などございませぬ。ございませぬがあの時米をお取りになったのは、お役人様ではありませぬか。」

小役人

「何を無礼なことを言う。恐れ多くもお上のネンキンであるぞ。証拠がなければネンキンは出せぬ。ええい、しつこいやつじゃ。下がれ、下がれ！下がらぬか。」

### 情景 1 5

定吉が役場の守衛に棒で小突かれながら、役場をたたき出される。頭にこぶを作って定吉がトボトボと歩き出す。定吉が歩く道の1丁程先の日当たりの良い丘の上に。まことに立派なお屋敷が見える。定吉は、通りすがりの物売りに、その屋敷の主を尋ねる。

定吉

「もうし、そこの方。あちらに見えるお屋敷はどなた様のお屋敷かの？」

物売り

「知らぬのか。あれは今をときめく社会保険庁長官様のお屋敷ぞ。」

### 情景 1 6

定吉夫婦の家。お里が病気で寝ている。定吉はぼんやりと縁側に腰を下ろし、途方にくれたように物思いにふけている。台所の米櫃の蓋が開いており、中身は米粒が2-3粒しか残っていない。そこに黄緑（年金通帳と同カラー）の装束をつけた若いお侍が通りかかり、定吉に目を止めて話しかける。肩口に民主党と縫込みがしてある。

民主党

「おじいさん、何かお困りのようですが、私に話してみませんか？」

定吉

「いんや、あんた様のようなお侍には分からん事じゃ。」

民主党

「おじいさんはこの前役場でネンキンを申請していた人でしょう。ネンキンがもらえなかったのですか？」

定吉

「そうじゃ。あのお役人はオラが飢饉の時にネンキン米を出さなかったというて、ネンキンが出せないというのじゃ。オラはヒエを食ってまでネンキン米を欠かしたことはないがの。」

民主党

「ネンキン米の記録が残っていなかったのですね。今多くの人たちがおじいさんと同じように、ネンキンの記録が無いといわれて、年金がもらえなくてとても困っているのです。私たち民主党はだからネンキン米を出した時に、いくらネンキン米を出したか年金通帳にしておくべきだと、ずっと前から主張していたのです。」

定吉

「あんた、民主党というのかね。そりゃー、そんな通帳があつたらオラもこんな目には遭わんで済んだわな。」

民主党

「そうです。おじいさんは本当にネンキン米を欠かしたことはないのでしょうか？」

定吉

「そうじゃ、オラ嘘つかね。あの飢饉の時にオラの子供が死んだのが何よりの証拠じゃ。」

民主党

「それではおじいさんはネンキンをもらえるべきです。民主党はおじいさんのような方がネンキンをちゃんともらえるように、年金仮払という仕組みを提案しているのです。」

定吉

「なんじゃ、そのカリバライというのは？」

民主党

「おじいさんのようなネンキン米の記録の残っていない人でも、申請すれば誰でも年金が仮にもらえるのです。」

定吉

「あんた、そんなことをすれば嘘こいてネンキンをちょろまかすものが出てくるじゃろ。」

民主党

「いいえ、これは仮払いなので、後で調べて申請が嘘だったら貰った年金は返さなければなりません。また悪意で嘘の申請をしたら、牢屋にも入ってもらわねばなりません。」

定吉

「それだったら誰も嘘をついてネンキンをごまかすものなどおらんわの。」

民主党

「そうです。誰も嘘をついてまで年金をごまかす人などいないのです。おじいさん、ネンキンとはもともと助け合いと信頼に基づいてできている仕組みなのですから、その支払いも助け合いと信頼に基づいて行なわれなければならないのです。」

字幕

「民主党は国民を信頼しています。年金通帳と年金仮払制度を提案する民主党をご支持ください。」

日本昔話テーマソング

坊や一よい子だねんねしな一…